

東北農業経済学会 Newsletter ◆ 2019 秋号

第55回 宮城大会報告

2019年9月4日～6日に第55回大会（宮城大会）が開催されました。今大会は東北大学青葉山キャンパスにて2019年度日本農業経営学会研究大会と連動して開催されることとなり、初日に個別報告、二日目に宮城県内の3.11津波被災地の農業・農村の復興状況を学ぶエクスカージョン、そして最終日に大会シンポジウムが行われました。テーマは、第48回大会（宮城大会）「東北農業・農村の復興-被災地・宮城から考える-」の続編として、「津波被災地域の新たな農業の展開とその担い手」が掲げられ、門間敏幸会員（東京農業大学名誉教授）の座長のもと、以下の6報告がなされました。第1報告「農地復旧・復興と合意形成-宮城県における震災復興を事例として-」郷古雅春氏（宮城大学）、第2報告「仙台平野の先端プロによる復興支援-乾田直播体系の技術開発・普及を中心に-」大谷隆二氏（東北農業研究センター）、第3報告「津波被災地域の農業再生」鈴木保則氏（農事組合法人井土生産組合）、第4報告「農業法人を核とした地域コミュニティの再生」安部俊郎氏（有限会社アグリードなるせ）、第5報告「東日本大震災より7年間の取り組み」阿部聡氏（株式会社イグナルファーム）、第6報告「新しい農業の担い手の特徴と今後の営農展開の課題 農業法人の展開と地域」西田陽平会員（一般社団法人宮城県農業会議）。

これら報告に対して、角田毅会員（東北大学）と伊藤和子会員（宮城県農業・園芸総合研究所）からコメントが出され、多くの論点が提示されました。これに参加者から出された質問を加え、総合討論では活発な意見交換が展開されました。シンポジウムの後には青葉山みどり食堂を会場として懇親会が開催され、会員相互の交流が深められました。

なお、初日の個別報告は、青葉山コモンズ（東北大学青葉山キャンパス）において行われました。5会場で計34本の報告がなされました。本学会が研究成果の発表の場として積極的に活用されていることを示すものです。

今回は19名の方々に座長をお引き受けいただきました。ご協力をいただきましたこと、感謝申し上げます。

最後に、今大会は155名の参加者（エクスカージョン参加者含む）を迎え、盛会のうちに終わることができました。会員の皆様のご支援、ご協力に心より感謝申し上げます。また今大会は、東北大学大学院農学研究科から共催いただくとともに、東北農政局をはじめ、宮城大学、宮城県、仙台市、宮城県農協中央会、全農宮城県本部、農林中央金庫仙台支店、JA 仙台、みやぎ農業振興公社、宮城県農業会議、NOSAI 宮城、日本政策金融公庫仙台支店からご後援をいただきました。さらに、これら関係機関・関係団体からは、実行委員や当日のスタッフ派遣、協賛品などのご提供などを賜りました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

宮城大会実行委員長 伊藤 房雄（東北大学）

役員会・総会報告

宮城大会の開催に併せて2019年9月4日（水）に役員会が、9月6日（金）に総会がそれぞれ開催されました。主な内容は次の通りです。

1. 2018/19年度の活動について

(1) 会員数の動向

2019年7月31日現在、個人会員247名。そのうち一般会員214名、学生会員33名。

団体会員 5団体

(2) 2018/19年度 事業報告

2018年

11月 ニュースレター2018年秋号発行

2019年

2月 農村経済研究 第36巻第2号(論文特集号)発行

3月 2018/19年度 第1回常務理事会開催(東北大学農学部、27日)

5月 ニュースレター2019年春号発行
2018/19年度 学会賞候補者募集

- 2019/20 年度 研究助成募集
- 7月 農村経済研究 第 37 巻第 1 号（秋田大会特集号）発行
- 8月 2018/19 年度 第 2 回常務理事会開催（東北大学農学部、2 日）
メーリングリストサービスの移行（Google グループへ）
- 9月 第 55 回 宮城大会開催（仙台市、4-6 日）

2. 2018/19 年度学会賞の選考結果について

次の記事をご覧ください。

3. 2019/20 年度研究助成対象者選考結果について

孟源会員、大鐘智香子会員2名への助成が決定。

4. 投稿規程の改正について

①投稿論文の種類明確化、②メールによる投稿開始への対応、③農業経済関連学会から要請のあった引用文献リストの統一への対応のため、投稿規程を一部改正しました。学会ホームページにおいて最新の投稿規程をご確認ください。論文執筆の際には、「論文投稿用テンプレート」をダウンロードしご利用いただくのが便利です。

5. 次年度大会開催地について

福島県での開催が承認されました。

6. 2018/19 年度事業計画について

以下の内容で承認されました。

- ・ 団体会員の拡充対策
- ・ 引き続き団体会員への呼びかけ文書に基づき、県担当理事を通じて交渉。各県、農協中央会、土地連、農業共済組合、農業会議、農業公社等へ送付。
- ・ 「農村経済研究」発行
- ・ 第 37 巻第 2 号（論文特集）
- ・ 第 38 巻第 1 号（宮城大会特集）
- ・ 福島大会プレ・シンポジウム（企画担当理事と福島県選出理事と相談の上、必要に応じて開催）
- ・ 第 56 回 福島大会開催
- ・ 2019/20 年度 学会賞表彰
- ・ 2020/21 年度 研究助成
- ・ ニュースレター発行（2019 年 10 月下旬、2020 年 5 月下旬を予定）
- ・ 常務理事会開催（2020 年 2～3 月、7 月下旬～8 月上旬）

- ・ J-STAGE への論文掲載
- ・ 会員名簿発行

2018/19 年度学会賞

2018/19 年度東北農業経済学会賞（木下賞）奨励賞および学会誌賞は、以下のように決定しました。受賞理由は以下のとおりです。宮城大会にて開催された総会において表彰式が行われました。

1. 実践賞

- ◆受賞者：安部俊郎（有限会社アグリードなるせ）
- ◆受賞対象：「東日本大震災からの農業及び地域の復興に関する実践」
- ◆受賞理由：受賞者は、東日本大震災による被災の中、迅速に対処し、地域の農業と社会の復興に尽力されてきた。復興の過程では、地域の担い手として被災による離農者の農地の受け手となり、地域の農業を維持するとともに、地域コミュニティの維持にも大きく貢献している。この過程で、地域のニーズを的確に汲み取り、経営発展と地域との共存共栄を実現してきた点が注目される。また、自社での加工販売への取り組みのほか、他業種との連携による 6 次産業化など、新事業も積極的に展開している。これら一連の実践は、受賞者による優れたリーダーシップとビジョンの下に実現されたものであるとともに、身をもって東北農業の発展に貢献しており、東北農業経済学会賞・実践賞の授与に相応しいものである。

2. 奨励賞

- ◆受賞者：水木麻人（東北大学）
- ◆受賞対象：「食品・農産物の消費者評価に関する研究」
- ◆受賞理由：受賞者は、主に消費者行動分析、マーケティング研究に取り組んできた。これまでの一連の研究の中で、農産物直売所を対象にした分析では、顧客満足度を構成する要素とその影響力を定量的に明らかにするなど、今後の農産物マーケティングにおいて注目すべき点が示されている。また、大学ブランド商品（日本酒）を対象とした分析では、支払意思額を推計し定量化することで、消費者選好の特徴と販売促進策を明らかにしている。これまでの研究は、調査対象範囲などの点で、限られた成果ではあるものの、受賞者の有する消費者

行動及び消費者選好を分析する計量手法の農産物マーケティングへ適用は、マーケティング戦略を策定する上での有用な知見や方策の解明に、大きく貢献するものである。この様に、受賞者の研究は、今後、さらなる発展が期待されるものであり、奨励賞の授与に相応しいものである。

3. 学会誌賞

学会誌賞候補論文は、第36巻第1号及び第2号に掲載された論文14本を対象に選考した結果、以下の二つに決定しました。

学会誌賞①

◆受賞者：西川邦夫（茨城大学）

◆対象論文：「庄内水田農業の現段階—構造変動の歴史的パターンは変わるのか?—」（第36巻第1号）

◆受賞理由：本論文は、庄内水田農業の構造変動の現段階的特質を歴史的なパターンである中規模性と集団性の2つの視点から分析した論考である。統計分析と経営調査というオーソドックスな方法で接近し、明確な結論を得ている。つまり、戦後段階では集落の集団性に支えられた中規模層のスケールアップが経営複合化による集約化を伴い進展してきた。2015年段階では、①中規模層のスケールアップによって構造変動がもたらされるメカニズムは健在であるが、②エダマメなどの経営複合化を伴う戦後段階の特質は失われつつあり、③米・大豆を中心とする粗放的で急激な規模拡大が進展している。④こうした構造変動は地域内発的ではなく、政策の影響力が強まっている。

研究の目的や方法、結果、考察を明示的に、分かりやすく記述していること、オーソドックスなテーマを取り上げ、地域農業研究に欠かせない基盤となる研究成果を蓄積したこと、そのなかで経営複合化の後退や粗放的な規模拡大など新たな知見を構造分析のなかに位置づけたことが高く評価されました。

学会誌賞②

◆受賞者：安江紘幸（農研機構東北農業研究センター）

◆対象論文：「6次産業化の商品開発におけるプロトタイピングの有効性—陸前高田市工房Aの事例分析による—」（第36巻第2号）

◆受賞理由：本論文は、6次産業化に取り組む農業経営にとって課題である、スタートアップ時の収益確保のため、プロトタイピングによる商品開発を実験的にを行い、その有効性を検証した論考である。実験科学的な手法による消費者調査結果に基づき、商品生産の仕様を決定し

た事例分析であり、その過程に著者も参画・関与したことが特徴である。プロトタイピングとは、試作品を早期に制作して何度もユーザー評価を行い、商品化を模索する手段のことであり、宮城県陸前高田市の工房を対象とする分析から、その有効性が検証された。具体的には、これまで1年かかっていた商品化までの期間を半年間に短縮することができ、開発コストが低減できた。また、商品開発担当者以外の構成員にも商品企画に関する積極性が醸成され、商品に対する当事者意識向上や商品企画へのアイデア発信などの効果が現れている。

研究の目的や方法、結果、考察を分かりやすく記述していること、我が国農業において期待の大きい6次産業化に関するテーマで、具体的な事例を対象に実験的な手法を適用し、営農現場に有益な結論を取りまとめたことが高く評価されました。

受賞者のことば

この度は、東北農業経済学会奨励賞を賜り、誠にありがとうございます。また、今回の受賞にあたり、これまでご指導いただいた諸先生方並びに調査等にご協力いただいた関係団体の皆様へも、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。私はこれまで、食品・農産物に対する消費者評価、特に様々な食品表示に対する消費者選好とそれらの表示が消費者行動に与える影響を明らかにするための研究に取り組んで参りました。消費者評価の研究を通じて、生産者と消費者がWin-Winの関係となれるような仕組みづくりに貢献することができればと考えております。この奨励賞受賞を励みとして、東北農業の発展に貢献できる研究にさらに尽力していきたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。

水木麻人（東北大学）

この度は、東北農業経済学会木下賞(実践賞)を賜り、誠にありがとうございます。東松島市野蒜地区は、東日本大震災による津波で大きな被害を受けました。しかしながら、震災直後から、営農再開、地域の復興に向け、地域と一体となり取り組んでまいりました。おかげさまで、様々な出会い、支援もいただき、現在に至ることが出来ました。この受賞を励みに、今後も地域の担い手として、農業と地域コミュニティの維持、発展に取り組んでいきたいと考えております。今後とも宜しく願い申

し上げます。

安部俊郎（有限会社アグリードなるせ）

この度は、伝統ある東北農業経済学会木下賞（学会誌賞）を賜り、誠にありがとうございました。大変光栄です。また、表彰式当日は出席できず、失礼いたしました。受賞の対象となった論文は、山形県鶴岡市における構造変動の性格を、センサス分析と実態調査から明らかにしたものです。庄内地方において生産力の担い手であり続けてきた中規模層を中心とした構造変動の歴史的パターンは変わらないが、政策的な影響が強まっているという、どちらかというとな保守的な結論となりました。我々研究者や政策担当者が農業・農村の変化をことさら強調しても、現場で実際に起こっていることは案外これまでと変わらない（歴史は繰り返す？）のかなというのが、本研究の過程で感じたことでした。学会のこれからの変わらぬ発展をお祈り申し上げるとともに、自身の研究の発展と地域農業・学会への貢献を考えていきたいと思えます。これからも、よろしくお願ひいたします。

西川 邦夫（茨城大学）

このたびは第 55 回東北農業経済学会木下賞（学会誌賞）を賜り、誠にありがとうございました。歴代の受賞者とともに名前を連ねることができ、大変光栄です。受賞対象となりました本研究は、Web アプリケーションや OS システムの開発手法として注目されている、プロトタイプを活用した商品開発の有効性の検証を実験的に試み、小規模な事業単位での商品開発や専門家等の確保が困難な農村地域においても、考案した商品開発の手法が活用できる可能性を明らかにしたものです。な



実践賞：安部氏 学会誌賞：安江氏
※2019.9.6 授賞式にて（水木氏、西川氏はご欠席）。

お、本研究を進めるにあたっては、東日本大震災で津波被害を受けた陸前高田市工房に勤める農漁村の女性らから多大な支援や協力を受けました。また、研究成果の取り纏め、論文作成にあたっては、学兄から多大なご指導・ご鞭撻を賜りました。このようなご恩に報いるべく、研究者として東北農業・農村の発展に寄与する研究成果を残せるよう、これからも切磋琢磨していく所存です。浅学非才ではございますが、東北農業経済学会各位との研究交流を通じて学問に邁進し、東北農業経済学会の益々の発展に貢献していきたいと思ひます。今後とも、どうぞ宜しくお願ひ致します。

安江紘幸（農研機構東北農業研究センター）

論文投稿のご案内

編集委員会では、多くの会員の皆さんからの論文投稿をお待ちしています。原稿は和文・英文どちらでも結構です。学会ホームページからダウンロードできる「論文投稿用テンプレート」を基に論文を作成し、論文投稿用メールアドレスに投稿票とともにお送りください。

論文投稿用メールアドレス：

submissiontojrse@grp.tohoku.ac.jp

詳細については学会ホームページの「会則・規程」の『農村経済研究』投稿規程をご覧ください。論文投稿に関する問い合わせ先は以下の通りです。

東北農業経済学会『農村経済研究』

編集担当理事 川島 滋和 あて

宮城大学食産業学群

〒982-0215 宮城県仙台市太白区旗立2丁目2-1

TEL 022-245-1257 FAX 022-245-1534

E-mail kawashim@myu.ac.jp

編集後記

◆台風で被災された方々におかれましては、心よりお見舞い申し上げますとともに一日も早い復旧・復興を祈念申し上げます。◆今年度も会員数増加となりました。右肩下がりの数値が多い中で喜ばしいことです。会員の皆様のご尽力に感謝申し上げます。◆都合により「会員のよこがお」はお休みさせていただきます。◆次号 2020 年春号は来年 5 月頃の発行を予定しております。(N)

東北農業経済学会理事・監事・評議員・顧問

任期：2018年9月1日～2020年8月31日

役職	選出枠	担当	常務理事	県担当	氏名	所 属
理事	宮城	会長（研究助成担当兼務）	○	○	伊藤 房雄	東北大学
理事	秋田	副会長（学会誌担当）	○	○	鶴川 洋樹	秋田県立大学
理事	山形	副会長（企画担当）	○		角田 毅	東北大学
理事	農研	副会長（学会賞担当）	○		宮路 広武	東北農業研究センター
理事	宮城	学会誌編集担当	○		川島 滋和	宮城大学
理事	秋田	庶務担当	○		中村 勝則	秋田県立大学
理事	会長指名	事務局・会計担当	○		水木 麻人	東北大学
理事	会長指名	庶務担当			上田 賢悦	秋田県立大学
理事	会長指名	広報・Web管理担当			小山田 晋	東北大学
理事	会長指名	学会誌編集事務担当			藤科 智海	山形大学
理事	会長指名	学会賞事務担当			安江 紘幸	東北農業研究センター
理事	会長指名	電子ジャーナル担当			吉仲 怜	弘前大学
理事	青森			○	石塚 哉史	弘前大学
理事	岩手			○	新田 義修	岩手県立大学
理事	山形			○	須藤 英弥	山形県村山総合支庁
理事	福島			○	新妻 俊栄	福島県農業総合センター
理事	新潟			○	伊藤 亮司	新潟大学
理事	青森				泉谷 眞実	弘前大学
理事	岩手				佐藤 和憲	東京農業大学（前岩手大学）
理事	宮城				大和田 祥代	宮城県環境生活部食と暮らしの安全推進課
理事	福島				荒井 聡	福島大学
理事	新潟				清野 誠喜	新潟大学
理事	新潟				塩谷 幸治	中央農研 北陸研究センター
理事	農研				磯島 昭代	東北農業研究センター
理事	域外				椿 真一	愛媛大学大学院
理事	域外				福田 竜一	農林水産政策研究所
理事	域外				藤井 吉隆	愛知大学
理事	域外				宮入 隆	北海学園大学
監事					木谷 忍	東北大学
監事					柘植 徳雄	東北大学
評議員	青森				小林 渡	青森県産業技術センター農林総合研究所
評議員	青森				成田 高	青森県農協中央会
評議員	青森				山田 泉	青森県農林水産部
評議員	岩手				及川 浩一	岩手県農業研究センター
評議員	岩手				照井 仁	岩手県農協中央会
評議員	岩手				今泉 元伸	岩手県農林水産部
評議員	宮城				竹中 智夫	宮城県農協中央会
評議員	宮城				高澤 和寿	宮城県農林水産部
評議員	宮城				秋山 憲孝	農林水産省東北農政局
評議員	秋田				近藤 悦応	秋田県農協中央会
評議員	秋田				齋藤 正和	秋田県農林水産部
評議員	山形				後藤 雅喜	山形県農協中央会
評議員	山形				卯月 恒安	山形県農林水産部
評議員	山形				高橋 哲史	山形県農林水産部
評議員	福島				橋本 正典	福島県農協中央会
評議員	福島				服部 実	福島県農業総合センター
評議員	福島				和田山 安信	福島県農林水産部
評議員	新潟				小林 巧	新潟県農林水産部
評議員	新潟				原 由紀子	新潟県農協中央会
顧問					川合 靖洋	農林水産省東北農政局